

6分団日記 ～その1～

プロジェクト6 (six) ～機関員の憂鬱～



6分団日記は、ちよっぴりの事実にとっぷりのフィクションを織り交ぜた“読み物”です。

神戸に消防分団があった。
機関員は憂鬱だった。分団のポンプは古かった。

(ワシが中坊のときに買ったポンプやんか。)

独り毒づいた。分団員は誰もそのポンプに触れようとはしなかった。

文化財保護デーがやってきた。分団の管轄区域には重要文化財を所蔵する寺があった。消防訓練が始まった。見物人も多かった。

「操作かかれ！」号令がかかった。

(ポンプ調子悪いし心配やなあ。エンジンかからへんかったら、どないしょ。なんや知らんけど真空あがれへん時もあるしなあ。ええい！いてこましたろ！) 機関員はポンプ操作を開始した。

(おっ！一発でかかったわ。ラッキー。何や真空あがりにくいなあ。ほんでも何とかあがったやんか。ワシめっちゃ優秀なんとちゃうん！)

「放水始め！」水は出た。放水点の分団長も顔をほころばせた。

「ドレン閉めんかい！」機関員の背後から雷が落ちた。団長がいた。ドレンは全開だった。真空があがったのは奇跡に近かった。

機関員の憂鬱はつづいた。

6分団日記 ～その2～

管槍

(かんそう:消防ホースとノズルの間に取り付ける管状の器具、かんそとも呼ぶ)



6分団日記はチョツピリの
事実に、たっぷりのフィクションを
織り交ぜた“読み物”です。

地元中学校生徒が総合学習の一環で、分団の訓練を見学に来ました。団員は必要以上に張り切っています。

放水訓練が始まりました。筒先は丁団員です。乙機関員が放水バルブを開けました。丁団員が踊りだしました。とうとう地面と仲良くなっています。乙機関員はあつけにとられて見とれていましたが、やっと我に返り、バルブを閉じました。必要以上に高圧で送水したわけではないと、乙機関員は自分に言い聞かせました。

団員の意地は、倒れても管槍を離さず“大惨事”は防がれましたが、丁団員のトラウマは防がれなかったようです。

問

次の○、□を埋めよ

「丁団員ハ ○ンデモ □□□ヲ ハナシマセンデシタ。」

答え

○=転 □□□=カンソ

誰ですかラ○パなんて書いたのは！

6分団日記 ～その3～

年末警戒と白い杖



6分団日記は、ちょっぴりの事実にとっぷりのフィクションを織り交ぜた“読み物”です。

年末警戒が始まり、普段は静かな分団詰所にも灯りがともり、笑い声が溢れていた。まだ9時前で一回りするには少し早いころだった。

詰所の前を、白い杖をついたおじいさんが何度も通りかかったのに団員の一人が気づいた。

「おじさん、どうしたの？」

「一杯飲んで、家に帰ろうと思たんやけど、帰り道がわからんようになったんや。」

「家の人に電話して迎えに来てもらおか？」

「わし、一人で住んどうねん。」

「・・・ほな、送ってあげるわ。」

おじいさんの手をとって歩き始めると、おじいさんは陽気にいろいろ話しかけてきた。

どんな話をしたのか、もう忘れてしまったが、おじいさんのびっくりするくらい冷たいその手を、団員は忘れることはできない。

今年も年末警戒がやって来る。

6分団日記 ～その4～

幻の団員



6分団日記は、ちよつぴりの事実にとつぷりのフィクションを織り交ぜた“読み物”です。

地域の自主防災組織への訓練指導をすることになったので、6分団の面々は、小学校のグラウンドへと集まった。地域の方々もそろったようで、分団長は集合の号令を掛けた。

「集まれ！」いつもながら気合の入った大号令である。分団員もきびきびと整列した。続いて点呼である。

「番号！」

「イチ！」「ニツ！」「サン、シツ！」「????…ゴ？」

「ロク！」

『どこに6人おるんじゃ！！』地域の皆さんの大突っ込みが響き渡った。

6分団日記 ～その5～

夢



今回の6分団日記は夢の中のお話です。実在の人物、団体、事件等とは全く関係がありません。

あれは何年前でしょうか。年末警戒の詰所でうたた寝をし、夢をみました。

管轄区域の中に、コミュニティ道路があります。狭くねらせて自動車を走り難くし“人間”のための道路にする、というものです。

年末警戒のパトロール中この道路にさしかかりました。

1台の乗用車が進行方向に直角に道を塞ぐように停まっています。両側の花壇、縁石にがちりと食い込んで、オイルや水蒸気を吹き上げています。

分団員の動きは機敏でした。一方通行のこの道の入口に1人が走り、他の車の進入を規制します。他の団員は漏れたオイルの処理や、乗用車を引っこ抜いての道路啓開など、あっという間の手際の良さでした。

運転手さんはベロンベロンに酔っ払っていました。

「あっ！あなたはL社のDさんじゃないですか。」

「そうれ～す。Dれ～す。」

完全に出来上がっています。ご近所のおよしみ、あとをJAFに引継いだ分団員達は何事もなかったかのように立ち去りました。

こんな夢でした。年末警戒が近づくと思い出します。